

# 兄たちが見た松岡映丘

石井正己



## 一 『故郷七十年』が語る松岡映丘

今では普通になった松岡五兄弟という言い方が定着したのは、そう古いことではない。一九九二年秋に姫路文学館で企画展「松岡五兄弟展」が開催されたときからだ。この時には松岡五兄弟の関連資料約二〇〇点が集められ、その人生や業績が紹介された。その時に発行された図録は、今でも五兄弟を把握し、比較するための基本資料になっている。

柳田國男・松岡家記念館では、五兄弟の業績の顕彰を始めた。柳田國男は広く知られるので、他の四人に焦点をあてている。二〇一五年は「松岡鼎展」柳田國男を導いた兄」、二〇一六年は「井上通泰展」歌を詠み愛した眼科医」、二〇一八年は「松岡静雄展」南洋に魅せられた海軍大佐」、二〇一九年は「松岡映丘画稿

展やまと絵でみる平家物語の世界」を開催し、それぞれ図録を発行した。

昨秋、歴史民俗資料館で「日本画家・松岡映丘の業績」の講演をした。ちょうどよい機会なので、そのときの内容を再構成し、町民のみならずをはじめ多くの方々に、その業績を知っていただく一助になればと考えた。明治時代になって西洋文化が導入され、絵画の世界でも西洋画が勢力を拡大していった。そうした時代の流れにあらがうように、映丘は伝統的な大和絵の再興に人生を賭けたと言っている。

柳田國男が神戸新聞社の要請によって語った『故郷七十年』（のじぎく文庫、一九五九年）は、時代の貴重な証言集である。同時に、五兄弟で最も長生きしたので、松岡家の歴史も語っている。その中でしか知られないエピソードも多く、書かれた文章にはないおもしろさがある。兄が語った『故郷七十年』を通して、そこからうかがい知ることのできる松岡映丘の人生をたどってみる。

映丘は一八八一年七月、父操、母

たけの八男として生まれた。「母の思い出に」に書かれる、板垣退助遭難の時代の次の事件は、翌年の出来事だった。若い酔狂人が門前に大の字になって「自由の権だい」と何遍か高く唱え、それが自由という語を学んだ最初だったという。國男七歳のときの事件だが、「それから今日まで此語はきらいである」というので、心に深く刻まれたことが知られる。映丘は国民の参政権の確立をめざした自由民権運動が勃興する時代に生を受けたのである。

一八八四年、四歳のとき、映丘は北条に移っている。辻川時代の思い出はかすかである。「東京の印象など」には、辻川と東京のことが見える。辻川の旅館「ます屋」は人力車の立場たてばになっていたので、三人の兄弟はそこに来て休む人力車の背後に描かれた武者絵を鑑賞するために、毎日のように通った。一八八七年、國男は兄の通泰に導かれて上京し、本郷の絵草紙屋で錦絵を買っては映丘に送ってやった。弟の絵心を刺激したのである。

ついでに、映丘という雅号の由来に触れる。それは本名の輝夫にちなんで兄の通泰が付けたものだった。映丘の二文字は古い文学にもあり、映丘を「オニテル」と読めることから

ら付けたもので、「エイキュウ」と音で訓よまれることは覚悟の上であった。映丘は一八九九年、一四歳で東京美術学校に入学し、一九〇四年、二四歳のときに主席で卒業した。この雅号が生まれた時期は不明だが、一二年の第六回文展出品作「宇治の宮の姫君たち」が早い例だろうか。

映丘は一八九一年に上京するが、「北斎漫画のことなど」で、國男は布川時代に映丘と一緒に『北斎漫画』を見たという。後述する通泰の「少年時代の輝夫」では通泰の家に来ることとする。通泰が『北斎漫画』を買い与えると、小学校から帰ってきた映丘は本を開いては中の絵を熱心に描いていた。通泰の記憶が確かだとすれば、御徒町時代の出来事になる。「柳井子の弟」では、映丘は母のたけにくっついていて秘蔵つ子で、小学校では自分の好きな子ばかり集めて遊んでいたという。

さらに「末弟松岡映丘」では、映丘が兄の通泰の縁で日本画家の橋本雅邦に師事したことに触れる。一八九五年、一五歳のときのことである。二年後には雅邦のもとを去り、大和絵の大家・山名貫義つとむに師事する。國男はそれを、「松岡流の、何か人と違うことをしようという気持があったからであろう」と推測している。

さらに新進の日本画家・小堀鞆音たまたまにつき、東京美術学校を受験した。この変更を貫義の死去と見ているが、その死は東京美術学校入学後なので、誤解があると思われる。

そして、「末弟松岡映丘」では、映丘が一九三八年に五八歳で亡くなったことを惜しむ。日本画を描くときの姿勢が健康に障ったことや風景画を試みたことは、後述するように、追悼以来の話題であった。いろいろな標本や手本を拵えていたが、戦災で焼けてしまった。外遊してイタリヤの名画を見て日本画と比較していたが、著書はわずかで、美術論をまとめるまでには至らなかった。理屈は言わなかったし、作品も多くなかった。今のは弟子がいるが、後世まで名前が残るかどうかはわからないと見る。映丘の業績を今日につなぐ発言として注目される。

## 二 兄・井上通泰が偲ぶ松岡映丘

一九三八年三月、松岡映丘が亡くなった後、追悼特集が美術関係の雑誌に組まれた。早いのは四月発行の『塔影』第一四巻第四号の「松岡映丘追悼特輯」であった。さらに、一九四〇年七月には国画院主催で「松岡映丘遺作展」が開催され、九月発行の『美術日本』第六巻第九号は「松

岡映丘遺作展特輯」であった。兄の松岡鼎と弟の松岡静雄は亡くなっていたが、兄の井上通泰と柳田國男は健在だったので、それぞれに談話を載せている。先立った弟を兄たちがどのように偲んだのかを見てみよう。

まず『塔影』には「少年時代の輝夫」がある。弟の國男は美術に理解があるので、芸術上の相談相手になっていたようであるが、自分は美術に無関心なので、関係が薄かったという。しかし、少年時代は手元に置いて面倒を見たことをあげる。輝夫は御徒町に眼科医院を開業した通泰の家に、一八九一年、一一歳のときに母と静雄と一緒に身を寄せている。松岡家は絵と無関係であったが、父の操には絵心があり、子供の時分にはよく絵を描いて遊んでくれた。その絵の多くは武者絵であり、機智に富んだものだった。学問の方面には濃厚な遺伝があったが、絵の方面の遺伝は輝夫一人に集中して伝わったと見る。通泰の家には暇さえあれば武者絵ばかり描いていたという様子は、それをよく伝える。しかし、通泰はその後、姫路と岡山に行ったので、輝夫の面倒を見たのは國男であった。進学については、「輝夫が画家を志し美術学校へ入った際は、親は反対の意見であったが、

自分が嘗て医者になりたくないのに無理に医科に入らされたことを思出し、同時に柳田が親の反対を斥けて最初の志望通り法科に入ったことを考え、当人の好める道に進むべきことを力説して美術学校へ入学させたのであった」と述べる。

美術学校へ進んだ輝夫が通泰に、「絵を描かせてくれ」と頼みに来た。それは、「小遣いが欲しくば絵を描け、決して只の補助はしない」と言い渡していたからである。この頃の絵は二幅残っているだけだという。一幅は養家・井上家の先祖・河野通有を描いたもので、一九〇五年、二五歳のときの作品、もう一幅は竜田姫を描いたもので、美術学校を出た一九〇四年、二四歳のときの作品であった。他には、焼失したものに熊沢蕃山が深草の元政上人と邂逅している図があり、倅が結婚したときに祝ってくれた小幅もある。一人立ちしてから頼んで描いてもらったものはないが、著書や歌集の装幀はしばしば頼み、『万葉集新考』には巻頭の雄略天皇の御製にちなんぞ若菜を描かせた。『万葉集新考』を見ると、若菜は口絵ではなく、表紙の型押しになっている。著書の装幀ということでは、國男もしばしば頼んでいるので、こうした関係は共通のものだった。

先の竜田姫を表装して床の間に掛けておいたのが日本画家の水野年方の目に止まって、ほめられた。「絵は若いが見どころがある、何という人の絵ですか」と尋ねられ、「実は自分の末弟だ」と答えると、「それは知りませんでした、今後は気を付けて拝見しましょう」ということだった。「意外なところで面目を施した」と述べるが、自慢したわけではなく、輝夫の絵が識者の目に止まったのであるから、兄としてはうれしかったにちがいない。

同じ頃、尺八堅に『万葉集』の真間の手古奈を描き、「非常に力を入れて描いたのだからせめて絵具代でも何とかして欲しい」と相談に来た。通泰は金がなかったので、友人の医師・賀古鶴所かこつるどに頼んで買い取ってもらった。この絵は蔵の中にあつて、関東大震災のときも助かり、今も残っているという。このとき、賀古もすでに亡くなっていたので、思い出深いエピソードだったにちがいない。人にやって今でも行方のわかるものとして、弁天様的大幅をあげる。遠州袋井にある曹洞宗の寺・萬松山可醒齋の住職・日置歌仙（後に永平寺管長）がこれを気に入って、何度となく「是非寺へ納めてくれ」と言ってきた。通泰は、「弁天様へお伺

いを立てたら坊主ばかりの所へ行くのは嫌だと仰言った」などと冗談を言ったが、結局、可醒齋に納められて、今でも寺にある。いつかこうした作品が姿を現すといいだろう。

話は先の河野通有の絵に戻り、一つ気に入らないところがあると述べる。蒙古襲来の際に一羽の鷲が飛んで来て、蒙古の大将の乗船を通有に教えたが、この絵は勘違いして鷲を射ようとしているように描いている。その点が嫌なのだが、武者の顔付きや格好を間違えずに描いているので、先祖の絵姿として我が家に伝えるつもりで所蔵しているという。

そして、忘れられないのが毎夏用いる浴衣の模様であった。河野通有の鎧下の模様が竜の丸なので、それを浴衣の図案にしようと考えて、下図を描かせた。以来、三〇年以上にわたって毎年揃えてきた。京都の呉服商が珍しがり、「決して売物にはしないから帯地や布団地などに自分の道楽で使うことを許してくれ」と頼まれた。最後は「輝夫の居らぬ今年の夏からは、浴衣を着る度にも、亡弟への思い出が新たであろう」と結ぶ。次の『美術日本』には「亡弟松岡を語る」がある。多くは「少年時代の輝夫」と重複するが、そうでない話もある。遺作展の折、国画院の者

が「どうしても出品したくて探したが所有者の分らない作が二点ある」と言った。一点は帝展に出品した「源氏」、もう一点は「維盛」である。「源氏」は益田孝が買って妹・繁子の嫁いだ瓜生外吉の所に移り、「維盛」は陛下の侍従である牧野伸顕のところにあることを通泰は知っていた。「維盛」は後で触れる「高野の維盛」であろう。

先の話では真間の手古奈は尺八豎の一幅の話しかなかったが、尺三の小幅と二幅であった。尺八豎は賀古医院にあり、尺三は米井商会主・米井源次郎の所に行った。また、輝夫から買い取ったもので珍しいもの一つに、彫刻家の内藤伸との合作の人麿の木像があったが、震災で焼けてしまった。遺作展が開催されたことによつて、所蔵者や焼失など映丘の作品の行方が注目されていたことがわかる。

最後に触れるのは、一九一六年の第一〇回文展に「室君」を出品した前後の話である。輝夫は文展で自分の出品を認めてくれないことに不平を漏らした。そこで、「それは一度調子を変えてみる、自分は絵の技術の事は分らないが、これは文学の方からの見解であるが信じてほしいことである、だが一生そうするのではな

く、世間に認められる間だけのことだということ必ず忘れるな」と助言した。「室君」で特選となった後、札に來たので、「世間とはそうしたものが、世に認められた上は今度は飽くまでも自分の信ずるところを貫かねばいけない」と言つてやった。

先の「少年時代の輝夫」では、「自分と輝夫との関係は大体輝夫が学校を出る時まで止つて了つていて」と述べていた。関係の濃淡から言えばそうしたことになるが、「室君」出品の際の助言にしても、映丘の人生を変えるほどの示唆であった。兄弟の関係は年齢とともに変わるのが当たり前であるが、通泰の中には弟の映丘を経済的に支えたという意識が強かったのだらう。それは、「小遣いが欲しくば絵を描け、決して只の補助はしない」や、「画家として一人立ちが出来るようになってからは、自分から頼んで描いて貰つたことは一度もない」などという言葉の端々に示されている。



松岡映丘  
(1881~1938)

### 三 兄・柳田國男が偲ぶ松岡映丘

もう一人の兄・柳田國男には『塔影』に「考えさせられた事」がある。國男は「亡弟松岡の追憶を語れ」と言われても、「結局一個の私情を語ることになるし、いまは第一そうしたことを話す気持ちになれない」とためらう。兄の通泰は「輝夫」と呼ぶが、國男は「松岡」と呼ぶので、その距離感はずいぶん異なる。通泰は幼い弟としてしか見ていないが、國男は弟という以上に、一人の人格として見ている。國男はまだ映丘の死を冷静に受け止められていなかったように思われる。

國男が映丘に最後に会つたのは二月二二日で、亡くなる八日前のことであった。大塚の東京女子高等師範学校で「労働服の変遷」の講演をした後、雑司ヶ谷の病床を見舞つた。「うつむいて絵を描くのは病気に障るから成るべく小さい絵を描くようにしなければならぬ」と忠告した。しかし、映丘は「結局自分一人で改良出来ることではない」とも、「大体日本画は上から筆を下して描くように出来て居り、昔の人も皆そうして描いていたのだから」とも言った。「今一遍会つて話して来よう」と考えているうちに、訃報に接してしまつたという。

映丘の病因については、体質が弱かった上に、煙草が過ぎたとしながら、「無病が却って無理をさせ、大作を続けているうちに知らず識らず姿勢を悪くし、それが遂に弟の健康への致命的欠陥となったものである」と推測する。最後の大作となった国画院の「矢表」と「後鳥羽院と神崎の遊女たち」にしても、衣裳の小さい模様まで自分で描いたので、どれほど体に障ったかわからないと考えている。日本画家の作画の姿勢と無理をして大作を試みる態度は、映丘だけでなく、日本画全体の問題にする必要があると考えていた。

通泰もそう認めていたが、國男自身も「弟が画家として立って以来、私は最も多くその相談相手となって来た」というだけに、映丘の若い死の原因を考えざるをえなかったであろう。すぐ下の弟・松岡静雄は二年前の一九三六年に亡くなっていたが、『故郷七十年』の「手賀沼の蛸釣り」に述べるように、「手賀沼に蛸を釣りに連れて行ってやる」とか「らかった一件以来、「一生私のいうことをきかなかった」という。それに比べれば、映丘はずっと近い関係だったのである。

そして、もう一つ述べる。映丘の仕事で残念に考えていることに、「い

い加減に人物画を止して大和絵の山水をやって欲しい」という希望が十分に実現されなかったという。当人の好みもあり、依頼の場合もあつて人物を主としたが、ほとんどが歴史画で終始したことを惜しんでいる。一九一四年の第八回文展に出品した「夏立つ浦」のような調子で、風景の方に進んでほしかった。この「夏立つ浦」は関東大震災で焼失してしまった。

一九一七年、柳田家の養父母の金婚式の祝いに描いてきた「春の海」と「秋の山」の双幅の山水があり、力を入れて描いてあるが、あまり賛成しないという。応接間に掛けてある「高原山」は一九〇七年頃（実際には、東京美術学校に赴任した一九〇八年）、塩原に写生旅行に行ったときの作品であつた。これは「絵巻の中の色々な優れた描写を総合的に纏め上げて新しさも見えている」と高い評価を下す。國男の言う風景画は、やはり写生や描写を重視したものであつたと知られる。

次の『美術日本』には「遺業を偲ぶ」がある。國男は『塔影』の談話と重ならないように意識して語つたらしく、「誠に困つた立場」と言いながら、今回の国画院の遺作展を見て新たに感じたことを述べてゆく。

それでもやはり重視するのは、映丘に描いてほしかった風景画である。

最初にあげるのは遺作展に出品された「紅玻璃」で、一九一九年の制作である。國男が外国に行つていたときで、展覧会に出品されたことさえ知らなかったというが、やや時期がずれている。「今度始めて見て、松岡の風景画としては好い作品であると思つた」と述べる。やはり評価するのは遺作展に出品された「紅葉の秋」（前述の「高原山」）で、「あんな風な風景画の方が私としては好ましい」と評価する。

また、兄弟が皆で映丘の仕事を手伝ったが、子供の描くものは決まつて人物で、真似たのは風の武者絵や人力車の後背に描かれていた歴史人物画であつた。そうしたこともあつて、最初から歴史人物画が専門のようになつたらしい。國男は幕府の御絵所であつた住吉家の最後の頃の墮落しきつた作品をたくさん見ていたので、「こんなものからすつかり抜け切つた違つたものを創造しなければいけない」とよく言つた。住吉家に対する批判は、そのまま映丘にも向けられていたのである。

さらに何点かの作品の批評に及ぶ。一九三一年の「聖尼クララの寺」は「正直の処どころが好いのかよく分らない」とし、「笛」などに「持味がよく出ていて好い様な気がする」と述べ、一九三六年の「小楠公」は「実際に好いものだと自分も思っている」とした。珍しく人物画を評価したのは、「大和絵でこうしたタンペラマンが出せるとは思つていなかった」からであつた。タンペラマンとはフランス語で氣質を意味する。

最後に、「松岡の全体の仕事の印象は線よりも色彩の方に力が入られてある」が、「もつと白描風のもの、線を生かしたのを見たかった」と述べる。この特集には、妻の松岡静野の「追想」もあり、映丘が色彩の美しさを追究するために、材料の使用法とその描法を研究していたことに触れている。

國男は映丘と六歳しか年齢が離れていないので、経済的な支援をすることはなかったはずである。國男に絵画の所蔵者についての言及がないのも、おそらくそうしたことによる。「単なる鑑賞者」と言いながら、日本画家や美術史家のような専門家にはない観点で批評する。どうも國男は、「風景画」にしても、「もつと白描風のもの、線を生かしたもの」にしても、若くして亡くなった映丘にさらなる可能性を見ていたようである。こうした見方は兄の通泰には

見られないものであり、映丘を終始、「松岡」と呼ぶ客観性からそれは生まれている。

#### 四 秋季企画展「松岡映丘画稿展」

記念館には一一〇〇点を超える映丘の画稿が収蔵されている。画稿は本画を制作するための下絵である。完成品ではないので、芸術的な価値は乏しいが、そこには本画に至る画家の構想や試行錯誤が残されていて、貴重である。なかには震災や空襲で本画が焼失して、画稿しか現存していないものもある。記念館では、保存と展示を考えて、軸装や額装を進めている。

弟子の岩田正巳は「新興大和絵のころ」の対談で、「先生の所へ行つて「お願いいたします」といった所が、「君は中学時代にどれほどの物語とか国文学をやったかね」と訊かれたので、「何とか少しぐらいは習ったような気がします」と言ったら、「ばかなこというな、そんな勉強の仕方では歴史画なんてやれるものじゃない。ほくは君、中学を出るまでの間に、現実をいえば『玉葉』のほか（古典文学は）全部読んだよ」と、もうそれだけでびつくりしましたね」と回想する。松岡家の教養と厳格な指導ぶりがうかがえる。

また、美術史家・木村重圭は「松岡映丘について」で、「宇治の宮の姫君たち」に触れて、「画壇への出発は、やはり古典文学中の最高峰『源氏物語』へ求めていたが、映丘の作品は大和絵の世界がそうであるように、いずれも古典文学に取材している。『源氏物語』をはじめとして、『栄華物語』『枕草子』『平家物語』『今昔物語』『太平記』等々からテーマを抽出して、それぞれの作品に仕上げた」と述べた。主な作品の一つに『平家物語』があったのである。

昨秋の「やまと絵でみる平家物語の世界」は、作品別展示の第一回とも言える開催になった。この企画展では、武者絵を得意とした映丘が日本を代表する軍記物語である『平家物語』をどのように絵画化したのか、その一端を示すことができた。その中から物語の展開に即して三点を選び、気づいたことを述べておきたい。その三点は、木曾義仲に追われて都落ちした平家一門と、それを追撃する源義経らの動向を描く。

#### ①画稿「忠度訪俊成」

これは平清盛の弟・薩摩守平忠度の都落ちの場面で、巻第七の「忠度都落」に相当する。忠度は藤原俊成を和歌の師匠としていた。一門の人々とともに都落ちしたが、侍五騎と童

一人と引き返し、俊成の邸を訪ねると、門の扉を閉じていた。「忠度」と名乗ると、邸の中では「落人帰り来たり」と騒ぎ合う。忠度が馬から降り、「別の子細候はず。三位殿（俊成のこと）に申すべき事あって、忠度が帰り参つて候ふ。門を開かれずとも、この際まで立ち寄せ給へ」と言うと、俊成は門を開けて会うことにした。

映丘の画稿「忠度訪俊成」は一七〇一年、三七歳のときの作品である。俊成の邸の従者が門の扉をかすかに開き、灯りを持った侍と会話をしている場面を描く。脇に立つのが馬から降りた忠度で、後方には侍たちが馬とともに控えている。源氏の世の中に変わろうとする時代に、都落ちする平家の一人を邸に入れることは命がけの行為であったにちがいない。画稿ではあるが、『平家物語』本文には具体的に書かれていない緊張の瞬間を絵画化して見せている。

その後には、次のような話が続き。忠度は俊成に、勅撰集を撰ぶことになったとき、一首でも入れてほしいと頼み、秀歌を書き集めた巻物を鑑の合わせ目から取り出した。受け取った俊成はいい加減には扱わないと約束する。その後、俊成が『千載集』を撰んだとき、「さざなみや志賀の都は

荒れにしを昔ながらの山桜かな」の一首を「よみ人知らず」として入れた。忠度は朝敵になったので、作者名を載せられなかった。忠度と俊成の和歌に対する情熱を示す話であった。

#### ②画稿「鴨越」

これは源義経が平家を奇襲する一谷の合戦の場面で、巻第九の「逆落」に相当する。義経が谷底に陣取る平家の屋形や仮屋を見渡して、鞍を置いた馬を追い落とすと、三匹が上手に落ち着いた。そこで義経は、「馬どもはぬしぬしが心得て落とさうには損ずまじいぞ。くは落とせ。義経を手本にせよ」と言って、三〇騎ばかりの先頭に立って落ちて行き、大勢の侍がそれに続いた。

映丘の画稿「鴨越」は一八九七年、一七歳のときの作品で、姫路市立美術館に本画が残る。先の「忠度訪俊成」より二〇年早く、東京美術学校に入学する前の作品であった。「中学を出るまでの間に、現実をいえば『玉葉』のほか（古典文学は）全部読んだよ」という言葉は、大袈裟ではなかった。すでに大和絵の構図はできあがっていて、大盤石の谷を、侍がかざす灯りを頼りに真っ逆さまに駆け落ちる義経の勇姿を描く。頭を深く下げた馬と、それでも直立する義経のバランスが見事である。

この後には次のような話が続く。垂直に切り立つ谷を目にした侍たちは途方に暮れるが、佐原義連が進み出て、三浦の方ではこのような場所を馳せ歩いていると言つて、先頭に立って駆け下りたので、侍たちも続いて下った。三千余騎だったが、やまびこが反響して一〇万余騎に聞こえた。村上基国の手の者が火を放つて、平家の屋形や飯屋をすべて焼き払った。義経の判断は見事であり、平家は四国の屋島に落ちて行くことになる。この合戦は平家の敗走を決定的にしたと言ふことができる。

### ③画稿「高野の維盛」

これは清盛の孫・平維盛が高野山にいる滝口入道時頼を訪ねた場面、巻第一〇「横笛」「高野巻」に相当する。維盛は都に残した妻子のことが忘れられず、郎等の重景・童の石童丸・舎人の武里を連れ、船で紀伊に向かう。しかし、叔父・平重衡が生け捕りになったことを思つて都へ行くことは断念し、高野山に登った。そこには、かつて侍として仕えていた時頼が出家していた。時頼は横笛との関係を父に咎められて、一九歳で出家した。嵯峨にいる時頼を横笛が捜し求めて来たので、再びそのようなことにならないように高野山に移った。維盛はそこを訪ねたのであった。

映丘の画稿「高野の維盛」は、制作時は不明であるが、細部まで丁寧に描いている。時頼は三〇歳にもならないのに老僧姿にやせ衰え、深く仏道に心を入れた道心者になっていた。中央に苦悩する維盛の姿を描き、左には時頼が合掌して数珠を持つ姿の一端を描く。手前には鎧姿でうなだれる姿を描くが、重景であろう。本文には、二人が対座する席に重景が同席したことは書かれていない。それぞれの姿に映丘の洞察力が発揮されている。

この後には次のような話が続く。維盛は時頼に、ここで出家して、熊野参詣の宿願を果たしたいと語る。重景と石童丸に菩提を弔うように頼むが、二人はそれを断つて自ら髪を

剃り、維盛も出家する。武里には最期を見届けて、屋島に戻るよう言う。その後、維盛は熊野三山の参詣を済ませ、時頼の導きで那智の沖に入水し、重景と石童丸も続くが、武里は泣く泣く屋島に戻る。平家嫡流の維盛の数奇な人生が語られている。

こうして見るだけでも、映丘の大和絵が従来のもものと違うことは明白である。特に「高野の維盛」は、妻子への執着と浄土への憧憬に苦悩する維盛の姿を見事に描く。大和絵でありながら確固たる人間像を表出したところに、映丘の達成がある。これが画稿でなく、色鮮やかな本画であればさぞやという思いはあるが、それに固執する必要はあるまい。先話では、「維盛」という作品が牧

野伸顕の所蔵であることも確認できているので、いつか見ることができるとも超える画稿のデータベースが構築されれば、私たちは松岡映丘の全体像に迫ることができるはずである。

### 引用文献

- ・市古貞次校注・訳『平家物語②』小学館、一九九四年。
- ・姫路市立美術館ほか編『生誕一三〇年松岡映丘展』神戸新聞社、二〇一一年。
- ・姫路文学館編『松岡五兄弟』姫路文学館、一九九二年。

(柳田國男・松岡家記念館顧問、東京学芸大学教授)



画稿「高野の維盛」